

大阪錦繪新聞

第33号



あはれ小角の芝居の大舞臺 檜の火もあつて
牡丹の花の火も松の玉の振り毛のてげさによちよちとつりし
火がわらふありひびく大一座見物客へ表木戸逆張り
裂る程大入 群集一同ト裏木戸へ消防方多入敷
駆付たる八川付の古来掃多人氣也(おん)の事
あんとて着て用意とせよと亦舞臺は火の玉も
恐まぬ氣性の膽玉とさか火とも消して
残らば獅子の所化事も目出さく
四月十九日 七つ、獅子のチ
だつたガツト評判くも、藝に親王と
多見藏と譽言聲満るもか中に、或る願負より
見舞じて、金五十円贈じふ、竹本君太夫 耶麻
(火水とも恐まぬ獅子の勢ひは三回無双多ひ膽玉)
と祝しなまへ、ねしろ獅子嬉しと。
月幸円と其後、君太夫(遣へ世)とあん

浪花画工 笹木芳龍速



八尾善板

大阪錦繪新聞33号 文庫10-8065-7